

MiniMax M3：知財実務を変革するネイティブ・マルチモーダルMoEモデルの全貌

2026年6月に公開されたオープンウェイトのネイティブ・マルチモーダルMoEモデル。膨大なコンテキストと高効率な推論能力で、知財（IP）実務を含む専門領域での活用が期待される。

1. 基本スペックと主要な特徴



MoE (Mixture of Experts) 構造により、モデル全体は巨大でありながら、推論時の計算コストを大幅に抑制しています。

【主要仕様値】

項目	内容
アーキテクチャ	60層 MoE (128 Experts / 4 Experts per token)
推論速度向上	1M文脈時：演算量1/20、デコード19倍速高速化（前世代比）
公開形態	オープンウェイト（Hugging Faceで重みを公開）



ネイティブ・マルチモーダル



テキスト



画像（最大2016px）



動画（S12 frames対応）

後付けのアダプタではなく、学習初期段階から視覚ビテキストの意味空間を統合。動画の時系列イベント抽出も可能です。

2. ペンチマーク性能（公式公表値）



SWE-Bench Pro
59.0%

複雑なソフトウェアエンジニアリング課題の解決能力において、高にスコアを記録しています。

83.5

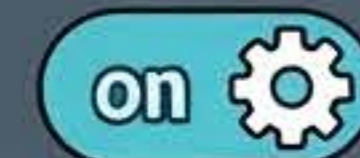
BrowseComp

Webブラウジングを伴うタスクや、複雑なタスクにおいても業界トップクラスの性能をえています。

84.6

Video-MME

推論モード（Thinking on/off）



on 複雑な推論（思考モード）



off 応答速度優先

複雑な推論が必要な場合は「思考モード」をオンにし、応答速度を優先する場合はオフにするなど、用途に応じた使い分けが可能です。

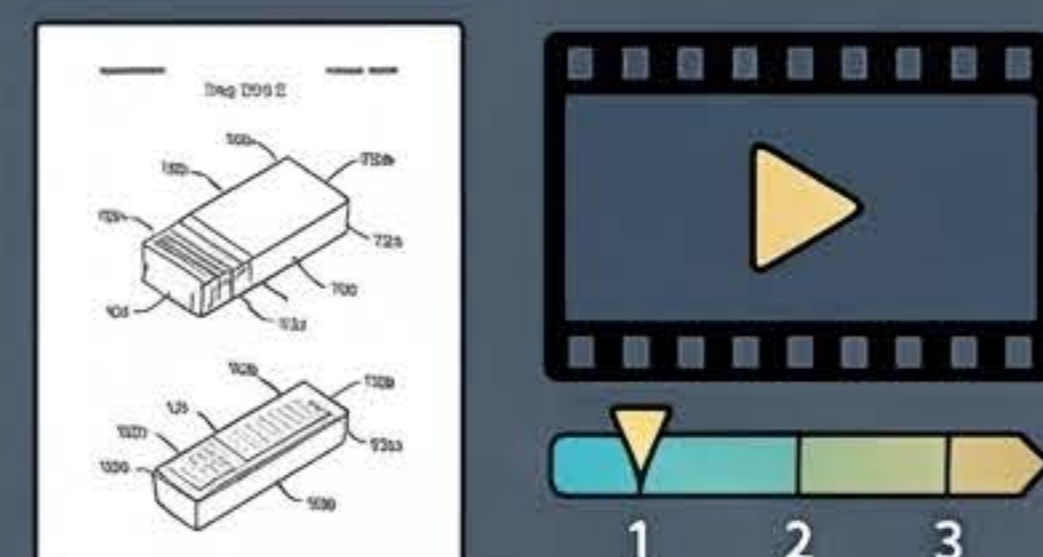
3. 知財（IP）ワークフローへの適用

A. 先行技術調査とクレームチャート作成



複数の公報から構成要件の箇所を特定し、特許番号付きで対照表を自動生成します。

B. 画面・動画からの構成要素抽出



特許画面から構成要素を抽出して用図網図と対応付けたり、動画から複雑な操作手順を抽出したりすることが可能です。

C. RAG + Evidence-First プロンプトの構築



モデルに指示で考えさせるのではなく、検索ツールと連携させ、後に「証拠（公報番号など）」を引用させる構成が回答品質を安定させます。

4. 運用上のリスクとガバナンス



商用利用のライセンス条件

年間2,000万ドル以上の企業は専用評価が対象。また適用利用時は "Built with MiniMax MS" の表示義務があります。



専有環境（オンプレ/VPC）での適用義務

公報預判などの機密情報を扱う場合、公報APIではなくHugging Faceの重みを利用した特許専用環境での運用が安全です。



「AIは説明者になれない」原則の遵守

各関係者の指針に準い、AIはあくまで道具として使い、最終的な特許書編定や判断は人間が行う必要があります。